

## 障がいの有無で分けられることのない社会はどうしたら作れるのか？

3年1組21番 西田 彩音

3年2組19番 萩原 美月

Keyword: 「障がい」「共生社会」「インクルーシブ」「教育」「差別」

## 1. 研究の背景

私たちがこの課題を研究しようと思った動機は、障がいの有無で分けられることに対して疑問を抱いたからである。昔は今ほど障がい者に関する知識が普及していなかったため、理解されずに差別を受ける人がたくさんいて、社会に出て働けなかった人もいた。それに比べて現在は障がいのある人を理解しようとしている人も増えてきて、社会に出て働けるようになる人や活躍できる人が増えた。しかし、それでも健常者との仕事内容に差が出たり、雑用をさせられたりして差別を受けている人がいる。

障がい者が働くにあたって導入されている、障がい者雇用制度は本当に良いのかを考え、障がい者雇用制度を作ることによって障がい者と障がいのない人を区別しているのではないかと疑問を抱いた。障がい者雇用という形ではなく、健常者と同じように採用できるような仕事内容の職業が増えると良いと思った。また、LGBTQに関して男女で分けることをダメだと言うのなら、健常者という言葉があることはおかしいと思った。

私たちは、なぜその人たちが“障がいがある”＝“変わっている”という考えを持ってしまうのか。なぜ人より少し遅れているというだけで差別の目を向けてしまうのか、まずはその人たちの考えを知り理解する必要がある。また、障がいについても調べたり話を聞いたりして理解し、お互いに生きやすい社会にしていくことが出来れば良いと考えたからである。

## 2. 先行研究の検討

今の日本は果たして共生社会と言えるのだろうか。

賃金や雇用形態(正規か非正規かなど)で如実に表れています。身体障害、精神障害、発達障害を比較すると、圧倒的に、知的障害者が厳しい条件に置かれていることがわかります。知的障害の特徴の1つに、自らの意志を伝えるのが難しい、主張しづらいとすることがあります。新規に障害者を採りたくないとする本音です。先進国の障害者のうち半数以上、そして開発途上国の障害者の大多数が失業者となっています。就職している障害者も、ほとんどは不完全雇用か、労働市場に十分に参加できない状態にあります。(藤井克徳・星川安之『障害者とともに働く』(岩波ジュニア新書・2020))

とあるように、障がいのある人が働きづらい環境にあるのが今の日本の現状である。障がいがあってもコツコツと仕事をこなす人や様々なスキルを持っている人もいれば、障がいがなくとも仕事をサボる人もいる。障害者基本法などに基づいて2016年から障害者差別解消法や障害者雇用促進法の差別禁止条項が施行されているが、差別や偏見を無くしたり減らすという本質的な変化には繋がっていない。だが、このような環境の中でも障がいのある人がバスの運転手になったという事例がある。

このように障がいの有無で分けるのではなく、共生社会を目指すためにも、日本の企業は障がい者も人材とみなして評価し、積極的に雇用を進めることが必要である。現状の日本はまだ共生社会とは言い難い状況にある。今後の課題としては、障がいを持っている人もそうでない人も暮らしやすい環境を作ることである。そのはじめとして、日頃の授業での教育の場を設ける・増やす

こと、人々の理解の場や身近に感じられる場を作り、深めることがまず達成すべき目標・課題への一歩である。

### 3. 独自研究

私たちは第二章を踏まえて、障がいに対してのイメージについて国際高校の生徒を対象にアンケートを5月頃に実施した。その結果、98件の回答が得られた。

まず、障害への正直なイメージを聞いたところ、「大変そう」や「他の人と変わらない」と答える人が多く居た。また、障がいの疑似体験をしたことがあるかを尋ねたところ、73.5%が「ある」、26.5%が「ない」と答えた。あると答えた人のほとんどは学校の授業などを通し、車椅子体験やアイマスクをつけての歩行などの体験をしていた。また、車椅子バスケットをしたという回答もあった。次に、困っている障がい者へ手助けをしたことがあるかを尋ねたところ、「ある」と答えた人は46.9%、「ない」と答えた人は53.1%いた。手助けが出来なかった理由を聞くと、「声をかける勇気がなかった」「手助けをしたいが接し方がわからない」という回答が半数を占めていた。

最後に、健常者や障がい者関係なく暮らしやすくするためにできることについて質問をした。理解を深める、バリアフリーという回答が多い中で私たちはある回答に着目した。それは「目の見えない人が助けを求めるサインとして白状SOSという白状を頭上にあげるなどのサインを知っておく」という回答だ。この回答から、授業などで障がいについて学び理解しているつもりでも私たちがまだまだ知らないことは多くあるということがわかった。

また、どのようにしたら障がいを持っている人に対して抵抗感を持つことなく、尚且つ勇気を持って話しかけ、互いに助け合いながら暮らしていくことができるのかについて考えた。この問題の根底にあるのは、“障がい”という言葉に対する抵抗感や間違った認識の仕方によるものだと考えた。日常生活を送っていく中で、テレビやインターネットなどで、障がいについての話題が上がる機会が増えてきつつある中、障がいを持っている人に対して差別的・偏見的な目を向けている人は減ってきつつあるが、まだそのような人は少なからずいるだろう。そのため、今後は実際に当事者の方にお話を聞き、困っていることやして欲しいことについて伺いたいと考えている。そして自分1人で考えているとどうしても偏った考えから抜け出すことができなくなってしまうため、視野の広い人が増えるように意見交換の場を設けていきたい。

#### 主な参考文献

藤井克徳・星川安之『障害者とともに働く』岩波ジュニア新書 2020

文部科学省 平成24年度 中央線教育審議会・初等中等教育分科会 特別支援教育の在り方に関する特別委員会「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育構築のための特別支援教育の推進(報告)